



も、問題は「体が弱っていくことも含めて人生なのである」と思えるかどうかではないでしょうか?』

1週間前からはケアの中心軸は徐々にご家族に移行する。

『死の1週間前からは、ご家族にもできることをすこしずつ手伝っていただくようにしています。体を拭くなんて、そのこと自体は最後までナースでもできる作業です。でも、そこで手伝っていただくことによって、ご家族に「自分も死を見送るためのケアができた」と思えるようになっていただきたいのです。

亡くなっていくかたに「自分は家族に大切にされている」という感覚を持ってもらうこともホスピスの重要な側面でもあります。』

田村恵子さんの死生感も参考になる。

『よほど歴史に名を残すような人物でもない限りは、人間というのは親しい人の心のなかに残るということですか、死後、生きた痕跡を残していけないのではないのでしょうか。わたしが生きていたことについて、100年経ったあとに誰が覚えているかと言ったら、誰も覚えていない。でもわたしの親しい人は、わたしが亡くなったことを受けてわたしとの関係で育んだものを抱えながら別の人とも接していく。これが、小規模ではあってもわたしという人間が死んでもつながっていく大切な気持ちなのかなと個人的に思っている。』

淀川キリスト教病院は、キリスト教徒の病院ではなく、宣教師が日本にきて、日本のなかでも医療の貧しいところに病院を作りましょうという意図でできた、一般市民のための病院である。このことも付け加えておきたい。

最後に。この本の中で私が一番好きな言葉。

『生きた結果にあるものが「死」。死があるからこそ今が輝く。』

私も、理不尽な死であっても、「死に向き合い、今を生き、最後の時間(とき)まで生き抜き生き切ることが大切」と思うようになった。

生について死について考えるためには、時間も必要であると思います。本書を通して、考えていただければ幸いです。

会員 井上 林太郎